

# 貨幣的秩序の存立構造序説（下）

大 田 一 廣

序

## I 貨幣的秩序のプロブレマティック

1. 近代のパラドクス
2. ダイコトミー・パラダイム
3. 近代の時間概念 ―ケインズとデカルト―

## II 貨幣的秩序と経済的秩序

1. 交換論と道具主義
2. 古典的世界と貨幣的秩序
3. コンヴェンショナル・ポイエーシスと他者参照（以上、前号）

## III 支払/受領システムのプロブレマティックと社会秩序（以下、本号）

1. 貨幣的秩序の事実性
2. 「負債」仮説と支払システム
3. 貨幣のプラクシスと匿名の秩序

結

## III 支払/受領システムのプロブレマティックと社会秩序

### 1. 貨幣的秩序の事実性

貨幣による財やサービスの交換が「市場」において日々遂行されていることは、“誰も”疑うことではないと思われる。貨幣と市場はそれほどに日常的なありふれた現象であることも、“誰か”にとっての事実であろう。しかし、貨幣と市場との理論的な関係は単純なものではありえない。貨幣が先か市場が先かといった貨幣/市場の先後関係のゲネシス問題に足を踏み入れると、無限後退の悪循環に陥らざるをえないだろう。貨幣がなければ市場は立たず、市場がなければ貨幣は意味がない・・・という循環である。すでに見たようにダイコトミー・パラダイムは、貨幣と市場（取引過程）をめぐるこのような循環論を事実上は実物的体系の方向に切断する立場なのである。しかしそれは単なる円環の方法論的切断にほかならない。交換論的文脈に対応した貨幣の道具主義的概念は、そのようなトートロジーを解消する方法論的な独断にすぎない。それに対してわれわれは、貨幣を、交換それ自体とは異なる「社会的制度」として捉えうることを強調した。

ところで、いわゆる「普遍論争」にも関与し、シャルル5世の鑄貨改革をも手がけたノミナリストたるN. オレスムは『貨幣論』(*Traité des monnaies*, c. 1360)で、貨幣をもって二財間の交換がはらむ「困難の縮減 (diminution)」を可能にさせる交換の便宜的な手段と規定する<sup>72)</sup>。この直接交換の「困難の縮減」⇨貨幣=便宜的手段説は、(1)二財間の直接的な交換が困難であること、(2)交換



の“場”たる市場を交換の困難を縮減するシステムとみなすという言説を帰結させる。この言説はそれ以降、ほとんどの経済学が踏襲してきたモデルであるといつてよい。貨幣を経済システムの「複雑性の縮減」機能と考えるN. ルーマンにおいても<sup>73)</sup>、このパラダイムは依然として作用しているといわねばならない。

しかし、G. ジンメルのように、貨幣という制度はなによりも先ず経済的交換を一般的に可能にさせる「普遍化形式」であって、この「形式」は「社会組織と超主観的なノルム」(soziale Organisation und übersubjektiven Normen)によって生成する<sup>74)</sup>。かりにもし貨幣が局所的・部分的に交換における困難(例えば、いわゆる「欲望の二重の一致の困難」)を縮減する機能を果たすことがあっても、それは、貨幣の普遍化形式が交換当事者の視点に対応的にもたらす部分効果なのであって、二次的・事後的な機能にすぎない。この貨幣形式によって、経済主体なる自律した人格と市場とは論理的には同時に形成されるというべきである。

ジンメルによって措定された近代の経済的世界は、このように貨幣によって分節化された匿名の事実的な依存関係であって、貨幣は諸個人にとって「絶対的な事実性」として顕現する<sup>75)</sup>。J. カルトゥリエの「支払システム」(système de paiement)論は先ずもってジンメルの設定したこのような貨幣の事実性という次元に定位する。カルトゥリエに従えば、貨幣は現実の経済的世界においては支払/受領のフロー・システムにほかならず、そのようなものとして貨幣が市場における交換を可能にさせるのである。「貨幣は、実際のところ、市場による調整という事態を示す名称にほかならない」<sup>76)</sup>。

このような貨幣の普遍化形式を可能にさせる「超主観的なノルム」の内部構造を分析し、それが現実の商品経済において、どのような制度形態として具体的に機能しているかを考察しなくてはならない。その際、最近書かれたM. アグリエッタとJ. カルトゥリエの共同論文“Ordre monétaire des économies de marché”(1998)<sup>77)</sup>はひとつの方向として参考になる。問題は、貨幣の制度的構造が同時に社会的秩序の生成のプロセスであること、すなわち貨幣的秩序の再生産はいかにして可能か、という点にある。

カルトゥリエ自身の「支払システム」論(支払システムとしての市場構造の理論)の骨格や特徴、理論史上の意義などについてはすでに正確な紹介があり<sup>78)</sup>、現時点で新たに付け加えるべきものはない。われわれはむしろ、貨幣的秩序の構成の観点から、特定の「貨幣システム」が存続するためにはその「貨幣システムに対する社会からの信任」が不可欠であるという論点<sup>79)</sup>をめぐって少ばかり考察することにした。

さて、アグリエッタ＝カルトゥリエはこの共同署名論文で、(1)貨幣は市場諸関係に論理的に先行するという命題とともに、(2)貨幣は市場よりも基底的で根源的な「社会的紐帯」(une lien sociale)であるという命題を提出している<sup>80)</sup>。前者は、貨幣は諸個人による交換関係の結果ではなくて、貨幣の方が市場の交換を可能にすると前提することによって、「既存の社会に埋め込まれている市場」を貨幣が自らの機能形態においてどのように開示するかを分析する。貨幣が市場経済を成り立たせている構成的な制度であるというのは、貨幣が根源的な「社会的紐帯」を示す制度だからである。それゆえ、市場構造は社会的制度として作動する「貨幣のプラクティス」にほかならない。そしてこの場合、取引債務(dette)の返済能力が“諸個人”を貨幣の支払/受領のネットワーク・システムに登録させるという論理が導入される。「支払システム」モデルはこのような文脈に定位されている。したがって、この取引債務の返済能力と貨幣の受領可能性とはどのような構造成態なのかが、問題となりうる。

後者のアプローチは、根源的な社会的紐帯としての貨幣は、“近代科学”としての経済学の“罅”を



越えるという理由からか、直接の考察からは除外されている。しかし、アグリエッタ＝カルトゥリエの貨幣論は単なる貨幣諸形態の機能主義的分析に自足するものではありえない。貨幣の「社会性の様式と効果」は近代社会の基底的な場面において分析されなくてはならないし、実際にはそのように読解できる文脈もある。

## 2. 「負債」仮説と支払システムとしての貨幣

アグリエッタ＝カルトゥリエは、貨幣を、商品経済的な市場組織よりも基本的で根源的な「社会的紐帯」と規定する一方、社会構成の次元で、この社会的紐帯は「負債（負担）」(dette) に基づくという仮説を提出し、このシステムの負債構造から貨幣の支払システム論を導く。個々人のあいだの諸関係は「相互的負債」の総体であって、この負債の相互性は各自の負う負債/義務関係をとおして「社会全体」との関連のうちに生じる。だから、この「負債」が規準化されるときや更新される場合は、「社会の全体化」が顕在化する機会なのである。この「負債」がとる諸形態は、神々、祖先、主権者、他者などとの義務関係を生み出す。そして貨幣は、そのような負債のなかでも、「主権」(souveraineté) と「価値の階層性」に関係する負債構造から“生じる”というのである。貨幣はこのような意味で、「私的当事者」と「全体としての社会」を往反する「相互的負債のメディア」なのである<sup>81)</sup>。社会的秩序の結節の基礎となる成員間の負債構造によって、貨幣は負債を規準化することで新しい負債を創造したり消滅させたりして、社会関係を存続させる。このような意味で、「支払システム」論は貨幣と「負債」との関係を分析対象として措定する<sup>82)</sup>。

だが、聖なる者や「至高性」への帰依や憑依が余剰の消尽システムであるというG. バタイユの議論はあるが、社会秩序の基本構成が一般に負債構造をもつかどうかは即断できないだろう。またA. ゲーレンは習慣の体系としての制度が関与者の「負担免除機能」をもつと言っている<sup>83)</sup> が、アグリエッタ＝カルトゥリエが制度としての貨幣を、成員間の負債（負担）を免除するシステムと考えているわけではない。制度としての貨幣は、私的な行為者の間の調整が市場によって遂行されるという事態を自らの「構成素」としているという意味で、貨幣は負債（負担）の免除ではなく、調整的統合の様式であるというべきだろう。

が、いずれにせよ、社会秩序の負債構造という仮説によって、現代社会のagentたる私的取引主体の存在条件は「債務の支払能力」(solvabilité) に求められる。

こうして、市場メカニズムを構成する3つの条件が設定される——(1) 共通の計算単位 (unité de compte commune), (2) 貨幣創造原理 (principe de monnayage), (3) 収支決済原理 (principe de règlement des soldes)。これら3つの条件において、取引主体が共通に依拠する価格や富の大きさを測定する計算単位に基づきつつ、個々の当事者の「分権的な行為」(actions décentralisées) が貨幣の入手に関してどのように制約されているか、そして局所的には個々に分権的な行為を「集合的な原理」へと差し向ける「交換の等価性」がどのようにして経済全体の規模を規定しているか——これらの構造をカルトゥリエ(＝アグリエッタ)は「支払システム」と呼ぶのである<sup>84)</sup>。支払システム論は、“私的個人”の自立性と交換の等価性との組み合わせが社会システムのなかで実際にどのように行われているか、同じことだが事実的に作動する「貨幣の論理」が近代社会の「分権性」と「相互依存性」とをいかにして産出しているかを分析する制度論的アプローチといつてよいだろう。

## 3. 貨幣のプラクシスと匿名の秩序

「支払システム」モデルにはつぎのような認識、すなわち近代社会は基本的に「分権性」(décentralisation) と「相互依存性」(interdépendance) といういわば両義性において作動するとい



う認識が前提となっている。

近代の市場経済では、個々の行為が社会的に分化しているという事態は、分権性と相互依存性ととの結合構造によって示される。分権的行為は、当事主体の局所的な行為は一定の範囲で可能であるが、“全体としての”経済は私的個人の経験を越える「意図せざる帰結」である。一方、相互依存性は、分権的な行為を集会的なまとまりをもったシステムに差し向けるように機能する。それは交換の等価性であって、この「ノルム」から逸脱すれば、「市場のサンクション」によって、当該行為の発散が調整される。そして、このような近代における分権性と相互依存性は、まさしく貨幣によって産出される。「貨幣は数量という抽象化によって価値の序列と階層性を示し、社会に対しては、諸個人のあいだに非人格的な関係を維持する相互依存性という構造をもたらし」<sup>85)</sup>からである。

このように貨幣による私的諸個人の抽象的な自立化と非人格的な依存性は、G. ジンメルが「貨幣は人間のあいだに関係をつくりだしはするが、しかし人間を関係の外部に放置する」<sup>86)</sup>と指摘したものとおなじ事態であるといえてよい。こうして貨幣のプラクティスによって産出される秩序は、「匿名の共同世界」にほかならない。

アグリエッタ＝カルトゥリエはこの間の事情を、つぎのように表現している。

「普遍的に妥当する基本ルールによって個人がそれぞれ複数の他者から成る匿名の共同世界 (la communauté anonyme des autres) に結ばれているのは、貨幣の論理によってである」<sup>87)</sup>

この「匿名の共同世界」は、貨幣の論理にしたがって（当該の文脈と役割編成において）行動する私的個人には直接知覚されえぬ「不可視の社会的全体」である。それが「共同世界」であるのは、「貨幣の諸ルールというシステムに内属する共同幻想 (croyance commune)」が支配しているからである。したがって「匿名の共同世界」においては、「幻想【信憑】 (croyance) のような【私的諸個人に】主観的に現れるものは、システム自体が備える属性的な関係」にすぎない<sup>88)</sup>。

このような「匿名の共同世界」はほかならぬ事実的な依存性の世界であって、この地平においてはじめて、「個人の自立と自由」が産出され、この文脈において“客観的な”実現目標が貨幣の一定量として諸個人にコンヴェンショナルに呼び掛けられ、それに呼応してこの規定目的を実現しようとする“主観的な”精神的態度が形成される。だから、ジンメルとともに、貨幣の論理に拘束された日常的な経済行為とその機能様式は実践的には、「始めも終わりもない目的論的な聯関」(einen ungeheuren teleologischen Zusammenhang)<sup>89)</sup>の裡に秩序化される、ということができる<sup>90)</sup>。貨幣は「人間の行為と関係とを主体としての人間の外部におく」<sup>91)</sup>のである。それゆえ制度としての貨幣が日常的に生成するということは、社会的秩序そのものが物象化という秩序へと不断に転回しつつあるという事態にほかならない。「私的当事者は貨幣と手を携えて、契約の秩序でもなく、計算の対象をなすのでもなく、人格が基本ノルムの主宰者としては現れないという意味で、どんな人格にも転移しない、そのようなひとつの関係を維持する」<sup>92)</sup>という指摘は、関係的存在としての貨幣のプラクティスへの明確な視点として記憶すべきだろう。

「貨幣のプラクティス」という経験は基本的に「他者性の経験」(l'expérience d'une altérité)であって、この「他者性の経験」を遂行することにおいて諸個人は「社会的全体」を媒介的に経験するものにほかならない。貨幣という秩序はこのような意味で、匿名の公共的秩序なのである。

われわれの生活世界という＜場＞は、このような匿名の公共的な秩序のネットワークにおいて、この拘束の裡で、toujours et déjà に生成していると考えられる。

ここにおいて、事態の再生産はいかにして可能かという問題は、再生産の秩序は秩序の再生産を



条件としてはじめて存立するというプロブレマティックに組み替えられるだろう。その場合、「場が行動に先行する」(塩沢由典)<sup>93)</sup>という言明に対していえば、「場」は「制度」に拘束され、「制度」はその現実態においては特定の役割編成態として存立し機能する。したがって社会的行為は、特定の役割編成のネットワークにおいて媒介的に遂行されうるだろう。そして、この媒介的な機能を一律に演じる社会的形式こそ、貨幣的秩序なのである。

## 結

さて、貨幣的秩序はいかにして再生産されうるか、あるいは貨幣に媒介された社会秩序はいかにして再生産されうるか——われわれは、その構造を理解するためにいくつかの論点について考察してきたが、問題は依然として未決のままである。

貨幣の論理に即応した社会経済的秩序の全体構造を解明するためにはすくなくとも、つぎのような問題を検討しなくてはならない。(1) 相互的行為のミクロ構造における他者参照と役割期待、(2) 歴史的時間に制約された経済という場の論理構造、(3) 近代それ自体が自己の存立根拠としている循環論的秩序の論理、(4) 社会的秩序の産出とイデオロギーとの関連などである。そして、A. ゲーレンが言うように、「制度は概念のように機能する」<sup>94)</sup>という事態をどのように捉えるかが、ひとつの鍵になるのではないかと思われる。

## 注

- 1) 本稿は、旧稿「貨幣的秩序の理論の一視角」(『制度の経済学の体系化』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書、平成11年4月、研究代表者 八木紀一郎)に加筆・修正を加え、タイトルを「貨幣的秩序の存立構造序説」と改めたものである。
- 2) 貨幣的秩序の存立構造論は、伝統的な存在論(ontologie)とも、いわゆる認識論(épistémologie)とも異なる第三の社会秩序論を志向する。この社会秩序論は歴史過程における秩序の生成や構築のプロセスを理論の内部に取り込むことを課題とするが、この秩序化過程は事態の再生産という形態において社会的に、それゆえわれわれに(fur uns)現象する。社会的秩序はこのゆえに再生産(re-production)という構造をもつ。この再生産のプロセスを解明するためにわれわれは「物象化」(Versachlichung, réification)の概念を指定する。社会存立論は、再生産の秩序が秩序の再生産を媒介にしていかにして生成するかについての言説たろうとする。
- 3) この問題構制の立て方はいうまでもなく、T. パーソンズに拠っている。Parsons, T./Smelser, N. J. [1956]を参照。
- 4) この論点は、遠くA. スミスの「共感」(sympathy)的他者論、現代では他者の眼差し(regard)が自由の制約になるというJ. P. サルトルの他者論、さらに、他者の他者性をめぐるE. レヴィナスの受苦的存在/受動性の現象学などにも通ずる思想史上の第一級の問題であろう。レヴィナスが「社会性と貨幣」(Buruggraeve, R. [1997]を参照)に関心を寄せるのは、当然なのである。
- 5) われわれのいう「契約論的人間像」とは原子論的なアトムとしての個人という近代ヨーロッパ世界に汎通的と思われる人間像を想定している。これは、ノミナリスムの概念に関連する。ノミナリスムの問題構造を考えるとき、坂部恵[1997]の簡勁な説明が参考になる。
- 6) 例えば、山岸俊男[1998]は、集団内の局所的な安定にもとづく「安心」という心理的様相が社会的知性としての「一般的信頼」の形成を阻害させようという論点を提出している。問題は、いうところの「社会的知性」とはいかなる事態であり、それはいかにして構築されうるかという点にある。
- 7) 例えば金子勝[1998]は、現代経済学が政策構想を欠いては成り立たないことを主張している。これはこれで



ひとつの見解である。政治経済学はそもそものはじめから、自らを広義の国家=社会論として設定してきたからである。だが、ネットの張り替えはいかにして可能だろうか？

- 8) Rawles, J. [1971]。
- 9) 今村仁司 [1998]。
- 10) Horkheimer, M./Adorno, Th. [1947]。
- 11) 根岸隆 [1981], 162ページ。
- 12) 例えば、吉川洋「実体経済の需要を呼び起こせ」というタイトルをもつ論説などはその典型であろう (吉川洋 [1998])。
- 13) 青木昌彦・奥野正寛 [1996]。
- 14) 塩沢由典 [1990], [1997] など。
- 15) G. ホジソン [1999], 39ページ。ただし、ホジソンの場合、純粋性/非純粋性といった近代のパラダイムに内在的な二項対立をやや安易に受容していることは、批判されねばならない。
- 16) 中島義裕/伊東敬祐/郡司・P・幸夫 [1998] など。
- 17) Polanyi, M. [1966] を参照。
- 18) 植村博恭・磯谷明德・海老塚明 [1999], さらに若森章孝・松岡利道編著 [1999] など。
- 19) Keynes, J. M. [1937], p.116.
- 20) 辻下徹 [1998], 109ページ。この「構成素」という考え方に關して辻下は「極端にいえば、その [構成素の] 表現形式が他の構成素との作用の指定そのものとなってもよい」ような“プロセスを構成素とするプロセス”というイメージを提出している。
- 21) 「正のフィードバック」に規定されるシステムの逸脱増幅的な (deviation-amplifying) 構造というアイディアは Magoroh Maruyama (丸山孫郎) に由来するもののようであるが、これは「負のフィードバック」システムを想定する「均衡モデル」の逸脱抑制的な (deviation-counteracting) 構造に対置されるものである。本稿ではしかし、システムは逸脱の増幅と抑制とを伴いつつ進行するはずであると考え。それは“主体”の視野とポジションに相関的な「場」の成立の契機をどこに求めるかという問題に関連している。だが、プロセス・システムの動態というもののイメージを形成しようとするとき、「正のフィードバック」に規定される deviation-amplifying は確かに有効であるといえる。田中政光 [1981] を参照。
- 22) 環境・文脈・主体のポジションの組み合わせは、文脈依存性・「状況合理性」・「役割期待」などを勘案する必要がある。T. ローソンの「状況合理性」(situated rationality) の概念は、“場の再生産”を解明する上で参考になりうる。Lawson, T. [1997a], [1997b]。
- 23) ケインズはこの論文では、貨幣を(1)計算機能と(2)ストック機能の二つに分類している (Keynes [1937], pp.115-116.)。
- 24) 植村博恭・磯谷明德・海老塚明 [1999], 39ページを参照。
- 25) 植村博恭 [1988] を参照。
- 26) Descartes, R. [1654], 67ページ。
- 27) *Ibid.*, 136ページ。
- 28) Descartes, R. [1664], 44ページ。
- 29) この「創発」という概念は Polanyi, M. [1996] による。
- 30) 野家啓一 [1997], 71ページ。
- 31) 近代の時間論については, Poulet, G. [1989-90] が参考になる。真木悠介 [1981], 198-90ページを参照。「瞬間的に共在する諸位相の連続態」というE. フッサールの時間論や大森荘蔵の“流れぬ時間”・制作としての歴史=物語という概念は、本稿の観点からも参照すべきものであるが、これは結局、歴史的時間および経験の構

造をどのように捉えるかにかかっている。大森莊蔵 [1992], [1994], [1996]などを参照。

- 32) 野家啓一の解釈学的な「物語行為論」(野家啓一 [1997])を参照。
- 33) Aglietta, M. [1988], p.98.
- 34) Smith, A. [1776], I-48, 56ページなど。
- 35) これは、貨幣と市場プロセスとの論理的な先後関係の問題に関連する。
- 36) 貨幣の一般的受領可能性と他者問題にかんしては、岩井克人 [1993] および大澤真幸 [1998] とくに「貨幣における他者性」を参照。貨幣の可能性の条件が「他者の他者」の“連鎖”を構造として想定せざるをえないという論点を明らかにしたのは、岩井克人であったが、この「貨幣の他者性」を歴史的時間に拘束的な再生産システムにおいてどのように説くかが、われわれの基本的なプロブレマティックである。
- 37) Orléan, A. [1998], pp.379-382.
- 38) *Ibid.*, p.362.
- 39) *Ibid.*, p.380.
- 40) オルレアンは自己言及的な貨幣の概念によって、「社会的な織物に複雑に織り込まれた社会的活動」が地域的人格から、普遍的な「経済的秩序」へと転成を遂げた「巨大な歴史的運動」を捉えることが可能だと見ているようである。(A. Orléan, *ibid.*, p.380.)
- 41) G. ジンメル [1999], 283ページ。
- 42) Hume, D. [1752], 48ページ。
- 43) 同訳, 53ページ。
- 44) 同訳, 53-54ページ。
- 45) 坂本達也 [1995], 第Ⅱ部第4章「『政治論集』における文明社会認識の展開」を参照。
- 46) Smith, A. [1776], II-94-95ページ。
- 47) 拙稿「経済学の冒険」(大田一廣・鈴木信雄・高哲雄・八木紀一郎 [1995], 所収)を参照。
- 48) Robbins, L. [1932]。この“ロビンズ定義”が定式化された前後には、有名な社会主義経済計算論争にミーゼス, K. ポランニ, ハイエクなどが加わっている。ポランニがこの論争のあと、経済社会の“原型”を模索していったことは良く知られているし、新古典派の理論前提をめぐるハイエクの“転回”もこの論争を契機としてであった。スラッフアやウィトゲンシュタインを含めて、1920-30年代における近代社会システムの秩序と構造をめぐる理論状況は、現代経済学の直接の“出発点”をさぐるためにも、丁寧な検討を必要とするだろう。差し当たり、西部忠 [1996], 村岡到 [1996]を参照。
- 49) Steuart, J. [1769], *Works*, II, p.270, 訳, 5ページ。
- 50) 竹本洋 [1995], 58ページを参照。
- 51) 同上, 60-61ページ。
- 52) Steuart, J. [1769], *Works*, I, p.42, 訳, 30ページ。
- 53) 竹本洋 [1995], 61ページ。
- 54) 模倣の問題は社会的秩序の生成にとってきわめて重要である。R. ジラルルの「欲望のミメシス」論(=ダブル・バインド論)とともに、G. タルドの『模倣の法則』(Tarde, G. de [1890])は検討される必要がある。ミメシス論については例えば、Derrida, J. et al., [1975] などがある。村上隆夫『模倣論序説』[1998] ははじめての本格的な模倣論研究として貴重である。
- 55) 竹本 [1995], 326ページ。
- 56) ステュアートの計算貨幣論を経済秩序の存在論的な対象構成の視角から読み込むことには、問題がないわけではない。貨幣的秩序の制度論を構想する本稿のひとつの読み方にすぎないが、塩沢由典による次の指摘がこのよう読解の契機となっている。「貨幣は個別の経済主体をこのように〔信用取引の決済などにより〕規制することを



通して、経済全体の活動水準をも調節する働きをしている。これは、記号系仮説が空想するような、意図的な計算の結果としてではなく、経済そのものに埋め込まれた貨幣の計算機能の効果である。」(塩沢由典〔1997〕, 226ページ)。この指摘は裏からみれば、“埋め込み”のプロセスをどのように理解するかということになる。

- 57) Steuart, J. *Works*, II, p.216. 訳, 451ページ。
- 58) Cartelier, J. [1996], p.61.
- 59) Aglietta, M./Orléan, A. [1984], *Avant-propos de la 2e édition*, p.3.
- 60) 塩沢によるミクロ・マクロ・ループ論は、われわれの観点からみれば、社会経済システムの再生産の論理(再生産の秩序と秩序の再生産の構造論)に吸収されるはずである。一言だけ指摘すれば、塩沢モデルは、ループのどの地点から説き起こすかという論点にほとんど無関心である。慣習的な場に制約された選択行動がループのどの地点で成り立つか、それがループとなりうるのはいかにしてかが問われねばならない。われわれの観方では、再生産の秩序が成り立つには、秩序の再生産という条件が再生産システムの内部に組み込まれていることを要件としている。ここで秩序とは端的に言えば「イデオロギー装置」(L. アルチュセール)にほかならない。そしてホモ・エコノミクス・パラダイムがドミナントであるかぎり、“ミクロ”の言説に定位することが理論構成の出発点となりうる。言説、とりわけ再生産の言説には説得機能が秩序の形成に不可欠な構成素だからである。この限り、貨幣的秩序の再生産は、イデオロギー装置の再生産を条件とする“ミクロ・マクロ・ループ”と言い換えることができる。ミクロ・マクロ・ループとは、事態が制度として再生産されること、およびそれを第三者たる考察者がそのように認知していること、にほかならない。
- 61) 廣松渉の物象化の概念は、それを拡張することによって、有効な説明の論理になりうる可能性がある。この点に関して拙稿「物象化の概念と経済学の隘路」(大田一廣〔1997〕)で少しだけ触れておいた。廣松渉〔1983〕を参照。
- 62) T. ホッブズ [1651], 訳, 第1分冊, 37ページ。
- 63) Melon, J.-F. [1736], p.212.
- 64) T. ホッブズ [1651], 訳, 「序説」注(2), 41ページを参照。
- 65) ムロンは、社会構成や政治体の諸制度、政策体系から理論や学説の体系までを想定して、政治体を構成するすべてのものをシステム(système)と考えている。この「一般的システム」は「サブ・システム」をもつ階層的なものである(Melon, [1736], p.330)。
- 66) Aglietta, M./Orléan, A. [1982], pp.50-51. [1984], p.52, 訳, 60ページ。
- 67) *Homo oeconomicus* の思想史的な系譜を跡づけたものに、Demeulenaere, P. [1996] がある。
- 68) Hume, D. [1739-40], 訳, 第4分冊, 63ページ。
- 69) 出口弘〔1997〕における循環概念(とくに174ページ)を参照。
- 70) L. テヴノ, J.-P. デュピュイ, A. オルレアンなど現代フランスの「コンヴェンション」派は、方法論的个人主義に定位してコンヴェンションの構成と動態を問題にしているが、われわれの場合はいわば制度論的コンヴェンションとでもいうレベルを開拓することがポイントである。フランスのコンヴェンション派の立ち上げ宣言には、*L'économie des conventions, Revue économique*, [1989] が、また Orléan, A. (dir.), [1994] がある。なお、若森章孝・大田一廣〔1994〕を参照。
- 71) K. マルクスは、たとえばコンヴェンションについて、次のように指摘している。「国家が Convention によって発生するのではないのと同じように、貨幣も Convention によって発生するのではない。貨幣は、交換から、交換のなかで、自然生的に発生するのであり、交換の所産である。」(Marx, K. [1857-58], S.97, 訳, 第1分冊, 150ページ)。
- 72) Oresm, N. [1989], p.48.
- 73) Luhmann, N. [1973], 訳, 60ページ。



- 74) Simmel, G. [1900], S.263, 訳, 分析篇, 298ページ。
- 75) G. Simmel, *ibid.* S.540. 訳, 総合篇, 43ページを参照。
- 76) Cartelier, J. [1996], p.61.
- 77) Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], pp.129-157. この共同署名論文はカルトゥリエの「支払システム」論（支払システムとしての市場構造の理論）が主要な論点となっているが、当然のことながら、両者の共同作品と見做して検討する。
- 78) 海老塚明「序章 社会経済システムへの制度論的アプローチ」および「貨幣・市場・資本主義」（植村博恭・磯谷明德・海老塚明 [1999] 所収）を参照。
- 79) 海老塚明, 同上, 49ページ。
- 80) Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], p.131.
- 81) この「相互的負債のメディア」は, Aglietta, M./Orléan, A., *La monnaie souveraineté*, [1998], Introduction, p.24のなかの規定である。
- 82) Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], p.134.
- 83) Gehlen, A. [1975], 訳, 27, 32ページなど参照。Gehlen, A. [1961], 訳, 「人間と制度」178ページ以下を参照。とくに「負担免除機能」としての制度の概念は重要である。
- 84) Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], pp.134-139.
- 85) *Ibid.*
- 86) Simmel, G. [1900], S.540. 訳, 総合編, 43ページ。
- 87) Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], p.147.
- 88) *Ibid.*
- 89) Simmel, G. *op. cit.* S.593. 訳, 総合編, 246ページ。
- 90) ここで, L. アルチュセールのいう“目的も主体 (Sujet) もないプロセス”としての歴史的・実践的世界を想起することもできよう。
- 91) Simmel, G. [1900], S.602, 訳, 総合編, 255ページ。
- 92) Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], p.147.
- 93) なお, 塩沢由典「当事者視点の導入は, 経済学をどこに導くか——植村貴久『制度と資本』の大構想をめぐって——」(塩沢由典 [1999]) は, (1) 習慣論の系譜としての制度論と (2) 「自己組織化過程の結果」としての制度論を指摘している。この論点は, toujours et déjà の構造とともに, 他の機会に考察したい。
- 94) Gehlen, A. [1975], 訳, 48ページ。

### 参考文献

- 青木昌彦・奥野正寛 [1996] (編)『経済システムの比較制度分析』東京大学出版会, 1996年
- 今村仁司 [1998]『近代の思想構造』人文書院, 1998年
- 岩井克人 [1993]『貨幣論』筑摩書房, 1993年
- 植村博恭 [1988]「資本循環における貨幣保蔵と信用」『政経学会雑誌』(茨城大学) 第56号, 1988年 3 月
- 植村博恭・磯谷明德・海老塚明 [1999]『社会経済システムの制度分析』名古屋大学出版会, 1999年
- 大澤真幸 [1998]『恋愛の不可能性』春秋社, 1998年
- 大森荘蔵 [1992]『時間と自我』青土社, 1992年
- 大森荘蔵 [1994]『時間と存在』青土社, 1994年
- 大森荘蔵 [1999]『時は流れず』青土社, 1999年
- 金子 勝 [1998]『反経済学』新書館, 1998年



- 坂部 恵 [1997]『ヨーロッパ精神史入門』岩波書店, 1997年
- 坂本達也 [1995]『ヒュームの文明社会』創文社, 1995年
- 塩沢由典 [1990]『市場の秩序学』筑摩書房, 1990年
- 塩沢由典 [1997]『複雑さの帰結』NTT出版, 1997年
- 塩沢由典 [1999]「当事者視点の導入は、経済学をどこに導くか——植村高久『制度と資本』の大構想をめぐって——」『経済学論集』(東京大学) 第65巻4号, 1999年4月
- 根岸 隆 [1981]『古典経済学と近代経済学』岩波書店, 1981年
- ジンメル, G. [1999]「近代文化における貨幣」, 北川東子編訳『ジンメル・コレクション』ちくま学芸文庫, 1999年, 所収
- 竹本 洋 [1995]『経済学体系の創成』名古屋大学出版会, 1995年
- 田中政光 [1981]「ルース・カップリングの理論」『組織科学』Vol.15, No. 2, 1981年7月
- 辻下 徹 [1998]「生命と数学」, 高橋陽一郎・辻下徹・山口昌哉『数学』青土社, 1998年, 所収
- 出口 弘 [1997]「人間を含む複雑系のシステム分析」, 木嶋恭一・出口弘編『システム知の探求1』日科技連出版社, 1997年, 所収
- 中島義裕/伊東敬祐/郡司・P・幸夫 [1998]「他者性としての貨幣と交換」進化経済学会編『進化経済学論集』第2集, 1998年
- 西部 忠 [1996]『市場像の系譜学』東洋経済新報社, 1996年
- 野家啓一 [1997]『物語の哲学』岩波書店, 1997年
- 廣松 渉 [1983]『物象化論の構図』岩波書店, 1983年(『廣松渉著作集』第13巻, 岩波書店, 1996年, 所収)
- ホジソン, G. [1999]「制度派経済学と資本主義の進化」, 横川信治・野口真・伊藤誠編著『進化する資本主義』日本経済評論社, 1999年, 所収
- 真木悠介 [1981]『時間の比較社会学』岩波書店, 1981年
- 村岡 到 [1996] (編)『原典社会主義経済計算論争』ロゴス社, 1996年
- 村上隆夫 [1998]『模倣論序説』未来社, 1998年
- 吉川 洋 [1998]「実体経済を呼び起こせ」(『朝日新聞』1998年10月20日付夕刊)
- 山岸俊男 [1998]『信頼の構造』東京大学出版会, 1998年
- 若森章孝・松岡利道 [1999] (編著)『歴史としての資本主義』青木書店, 1999年
- 若森章孝・大田一廣 [1994]「レギュレーション理論と『制度の経済学』」『経済論集』(関西大学) 第44巻第4号, 1994年10月
- 大田一廣 [1995]「経済学の冒険」, 大田一廣・鈴木信雄・高哲雄・八木紀一郎編著『経済思想史』名古屋大学出版会, 1995年, 所収
- 大田一廣 [1997]「物象化の概念と経済学の隘路」, 『神奈川大学評論』第26号, 1997年3月
- Aglietta, M. [1988], “L’ambivalence de l’argent”, *Revue française d’économie*, vol. III, no.3, été, 1988.
- Aglietta, M./Cartelier, J. [1998], “Ordre monétaire des économies de marché” in: Aglietta, M./Orléan, A. [1998].
- Aglietta, M./Orléan, A. [1982], *La violence de la monnaie*, 1re éd., 1982. [1984], 2e éd., 1984. (井上泰夫・斉藤日出治訳『貨幣の暴力』法政大学出版会, 1991年)
- Aglietta, M./Orléan, A. [1998], (dir.), *La monnaie souveraine*, Paris, 1998.
- Burggraeve, R. [1997], *Emmanuel Levinas et la socialité de l’argent*, Peeters, 1997.
- Cartelier, J. [1996], *La monnaie*, Paris, 1996.
- Demeulenaere, P. [1996], *Homo economicus Enquête sur la constitution d’un paradigme*, Paris, 1996.
- Derrida, J. et al. [1975], *Mimesis des articulations*, Paris, 1975.



- Descartes, R. [1654], *Médiations*, 1654. (邦訳『省察』、『デカルト著作集』白水社, 第2巻)
- Descartes, R. [1664], *Principia philosophiae*, 1664. (邦訳『哲学原理』, 同上, 第3巻)
- “L'économie des conventions”, [1989], *Revue économique*, vol.40, no.2, mars, 1989.
- Gehlen, A. [1961], *Anthropologische Forschung*, 1961. (亀井裕・滝浦静雄他訳『人間学の探求』紀伊國屋書店, 1970年 [復刻版1999年])
- Gehlen, A. [1975], *Urmensch und Spätkultur-Philosophische Ergebnisse und Aussagen*, 1975. (池井望訳『人間の原型と現代の文化』法政大学出版会, 1987年)
- Hobbes, Th. [1651], *Leviathan*, 1651. (水田洋訳『リヴァイアサン』岩波文庫, 第1分冊, 1991年)
- Horkheimer, A./Adorno, Th. [1947], *Dialektik der Aufklärung*, 1947. (徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店, 1990年)
- Hume, D. [1739-40], *A treatise of human nature*, 1739-40. (大槻晴彦訳『人性論』岩波文庫, 第4分冊)
- Hume, D. [1752], *Political discourses*, 1752. (田中敏弘訳『経済論集』東京大学出版会, 1976年)
- Keynes, J. M. [1937], “The General Theory of Employment”, *The Quarterly Journal of Economic*, Feb., 1937. in: *Collected Writings of John M. Keynes*, vol.XIV.
- Lawson, T. [1997a], *Economics and reality*, London & New York, 1997.
- Lawson, T. [1997b], “Situated rationality”, *Journal of Economic Methodology*, 4:1, 1997.
- Luhmann, N. [1973], *Vertrauen, ein Machnismus der Reduktion sozialer Komplexität*. 2. erweiterte Auflage, 1973. (大庭健・正村俊之訳『信頼』勁草書房, 1990年)
- Marx, K. [1857-58], *Okonomische manuskripte 1857-58, Teil I*, MEGA, 2. Abteilung. “Das Kapital” und Vorarbeiten, Bd.1, Berlin, 1976. (『マルクス資本論草稿集』①1857/58年の経済学草稿, 第1分冊, 大月書店, 1981年)
- Melou, J. F. [1736], *Essai sur le commerce*, nouv. éd., [s.l.], 1736.
- Orléan, A. [1994], (dir.) *Analyse économique des conventions*, Paris, 1994.
- Orléan, A. [1998], “La monnaie autoréférentielle”, in: Aglietta, M./Orléan, A. [1998].
- Oresme, N. [1989], *Traité des monnaies et autres écrits monétaire du XIV siècle*, textes réunis et introduits par C. Dupuy, Paris, 1989.
- Parsons, T./Smelser, N. J. [1956], *Economy and Society*, London, 1956. (富永健一訳『経済と社会』I, II, 岩波書店, 1958-59年)
- Polanyi, M. [1966], *The tacit dimension*, London, 1966. (佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊國屋書店, 1980年)
- Poulet, G. [1989-90], *Etudes sur le temps humain*, 4vol., Paris, 1989-90. (réimp.)
- Rawls, J. [1971], *A Theory of justice*, 1971. (矢島鈞次監訳『正義論』紀伊國屋書店, 1979年)
- Robbins, L. [1932], *An essay on the nature and significance of economics*, London, 1932. (中山伊知郎監修・辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957年)
- Simmel, G. [1900], *Philosophie des Geldes*, 1900. in: Georg Simmel, *Gesamtaufgabe*, Herausg. von O. Ramstedt, Bd.6, Suhrkamp, 1989. (元浜清海・居安正・向井守訳『貨幣の哲学』分析編, 『ジンメル著作集』第2巻, 白水社, 1981年。居安正訳, 総合編, 同, 1978年)
- Smith, A. [1776], *An Inquiry into the Nature and Causes of The Wealth of the Nations*, 1776. (大河内一男監訳『国富論』中央公論社, I～III, 1976年)
- Steuart, J. [1769], *An inquiry into the principles of political œconomy*, 1769. in: *The Works of Sir James Steuart*, 6vol., 1825. (rep., 1967). (小林昇監訳『経済の原理 第1・第2編』名古屋大学出版会, 1998年。同監訳『経済の原理 第3・第4・第5編』同, 1993年)
- Tarde, G. de. [1890], *Les lois de l'imitation*, 1890. (réimp., Edition KIME, Paris, 1993)

(1999年12月10日受理)